JIBSN 竹富セミナーに参加して

田中輝美　（ローカル・ジャーナリスト）

2014 年 11 月 14 日、沖縄県竹富町で、境界地域研究ネットワーク JAPAN（JIBSN）が主催する「竹富セミナー」が開かれた。昨年、長崎県五島列島で開かれた「五島セミナー」に続く参加となったが、今回はあらためて、JIBSN の進化と役割の大きさを感じることができた。以下、レポートしたい。

竹富セミナーの大きなテーマが「国境観光（ボーダー・ツーリズム）」。国内ではまだまだ耳慣れないとはいえ、海外ではここ数年、注目され始めている。昨年、日本初のモニターツアーが行われ、その報告があった。詳細は、当日の詳録を読んでいただきたいと思うが、概略は、福岡を出発、対馬を経由し、韓国・釜山に泊まって戻ってくるという 1 泊 2 日のツアー。日本の境界地域の中で、問題なく二国間を行き来できるのは、対馬くらいなのだという。企画は、JIBSN と九州経済調査協会の島田龍さんが共同で行い、ツアーの募集や実施は、JR 九州旅行が担当。料金設定は 22500 円。30 人募集したところ、あっという間に埋まり、2013 年 12 月に実施された。

旅好き、新しいモノ好きの血が騒ぐという個人的興味は置いておいて、国境観光に感じた意義を大きく 2 つ整理したい。一つは、島国の日本では、国境は海の上にあり、本土や「中央」に住む人々から見ると、遠く、ほとんど意識に上ることがない。地に足のつかないナショナリズムが台頭する背景にもなっているだろう。その国境を「見える化」して、国境地域に目を向ける機会をつくることに意味があると感じた。それは、企画した島田さんの問題意識にも、通じていた。対馬は、韓国人旅行客が急増し、一部で「対馬が危な

い！」という騒がれ方もされるが、島田さんは「本当に対馬は危ないのか？本当は『アツい』のではないか？」と投げかけた。人口 3 万人の対馬に、2013 年は韓国人が 18.2 万人も訪れた一方、日本人は、島民の移動やビジネスを含めて 23.6 万人で、この中で観光客は限られる。「問題は、韓国人が来るから危ないのではなく、日本人が対馬に関心を持っていないことではないか」。来もせずに、見もせずに、「危ない、危ない」と騒いで、隣国を排除したり閉ざしたりするのではなく、その地理的特性を生かして、観光資源化して人を呼び込む。素晴らしい発想の転換であり、国境地域の語られ方を変える可能性を秘めたチャレンジだと、非常に共感した。もう一つは、当たり前のことだが、地域経済への貢献だ。「行き止まり」として、可能性が閉ざされがちだった国境地域だが、人が定期的、定量的に訪れることで、観光産業は自立的になるだろう。対馬でも、実際に韓国人旅行客が増えたことで増改築した店や、福岡に店舗を出すようになった店もあるなど、経営状況が良くなっているケースがあるという。ひいては、国境地域に住む人を支え、トータルとして、それぞれの地域、日本全体の安全保障にもつながる。とはいえ、珍しさだけでは、すぐに飽きられ、人は来なくなる。食事や宿、お土産などの質は、有名観光地のレベルと比較すれば、まだまだ努力や工夫の余地があり、課題の一つと言えるという指摘もあった。珍しさだけに安易に頼らず、受け入れ体制の強化、質を磨くことが「来て良かった」「また来たくなる」土地となることが、中長期的には欠かせないのだと感じた。

報告では、今回のモニターツアーが定数に達しただけではなく、アンケートを見ても満足度が高く、半数が再訪意向で、ツアーを契機に興味を持つようになったと回答するなど、万人受けするものではなくとも、潜在的ニーズはあり、団体旅行商品として十分に成立する、と結論づけた。第二弾が来年 3 月に予定されているほか、竹富セミナーの会場となった八重山諸島でも、八重山と台湾との国境観光モニターツアーが来春にも実施予定。さらに、北では、最北端・稚内とロシアのサハリン間でも、実現を目指した動きが始まっている。対馬、八重山、稚内の 3 つを「ボーダーツーリズム」として統一したイメージで打ち出すことも目指したいとの表明もあった。実現すれば、大きなインパクトになる。実際、セミナー後に、国境観光について話した知人友人は「面白そうだ」「参加してみたい」と関心を示す反応が返ってきた。また、日本国内で、ほかにボーダーツーリズムができそうな地域があるかどうか、JIBSN の関係者に尋ねると、私の地元である島根県の「隠岐諸島」とのことだった。地元にそうした機運は今のところ感じられず、乗り越えるべき壁も少なくはないが、将来、何かの形で実現に向けて動いてみたい。さらに、観光をめぐっては、災害や戦争の跡地など人類の死や悲しみを対象にした「ダークツーリズム」も福島県などで提唱され出している。「ボーダー」と「ダーク」、この 2 つが連携して「新しい観光のカタチ」というような見せ方で売り出していくこともできるのではないか。さまざまな可能性が眠っているように感じた。

ボーダーツーリズムの話題が長くなってしまったが、報告を聞きながら「これぞまさに JIBSN だな」と納得した。JIBSN の大きな役割としては、アカデミズムと実務をつな

ぐ、ということと、実はつながりにくい辺境同士をつなぐ、ということがあるととらえている。その方向に向かって、着実に進化を続けている。国境観光という実践的チャレンジが形になっていること、そして、グローバル COE プログラムが昨年で終了し、今回は自費負担での参加となったにもかかわらず、日本の最南端&最西端に近い西表島に、北海道の稚内や根室、島根県など、同じような辺境から来た約 40 人が集まって、熱心に議論している姿を見て、その手応えを感じた。

最後に、夜の懇親会は、西表島の祖納地区公民館で、地元の方々による、心温まるおもてなしを受けた。島の食材を使った手作りの料理や、島の民謡などを披露してくださり、忘れられない夜となった。竹富町の皆様、そして、このような貴重な機会をくださった JIBSN の皆様に、あらためて感謝申し上げたい。